

## オンライン環境下で孤立しがちな学習者同士のつながりを意識した授業実践 ーインターナショナルスクールでの協働活動を取り入れた日本語授業ー

河野あかね・白田千晶・三木杏子・秋本瞳 (つくばインターナショナルスクール)

### 1. 実践現場の背景

当校は、幼稚園生から12年生までが在籍する、1学年1クラス(20~25名)の、国際バカロレアの認定を受けたインターナショナルスクールである。第一言語または優位言語が英語という学習者が大多数であり、家庭で日本語を使用している者もいれば、学校の日本語授業以外では日本語を使用する場面が全くないという者もいる。日本語授業は全員必修で、クラス内には様々な日本語力の学習者が混在している。そのため、日本語プログラムでは、多様な言語文化背景の学習者が助け合い尊重し合うような協働活動を意識的に取り入れている。また当校では、学習者および教員は日常的にコンピュータを使用する環境にある。授業活動や評価課題などで使用する場面も多く、小学校1年生でメールアドレスが与えられ、4年生以上は各自のコンピュータの持ち込みを必須としている。

新型コロナウイルスの影響下では、当校も複数期間の臨時休業となり、オンライン授業を実施した。幼稚園から高校までの一斉休業の時期もあれば、単学年の時もあった。また、1回の休業期間は数日から約4か月まで様々であった。コロナ禍以前から、学習者も教員も学校からは多様なオンラインツールを提供されていたが、実際には限られた場面や学年、教科、教員のみが使用するにとどまり、全体としては効果的に活用できてはいなかった。本発表では、2020年3月以降に実施した過去3年間のオンライン授業の小中高の各実践から、特に学習者同士のつながりを意識して取り組んだ授業の例を取り上げる。

### 2. 実践の目標

学校の臨時休業に伴い家庭からオンライン学習をせざるを得なくなった学習者は孤立しがちだった。特に日本語の学習で支援が必要な学習者は、他者とのつながりを持ちながら学習に取り組むことができない状況にあり、学習意欲があがらず成功体験の感覚もなかなか味わえない。コロナ禍初期のオンライン環境下では「学習者も保護者も教師も無理せずできることに取り組めば良い」という学校の方針があった。通常時とは異なる環境下でメンタルヘルスを第一優先に互いのつながりを大切にすることが求められたため、学習者同士の協働的な活動を通して、メンタルヘル스에配慮しつつ通常の教室活動と同等の学習効果を得ることを目標とした。

### 3. 具体的な実践の内容とその過程

#### 3.1 小学生の活動例 (小学校1年生)

日本語で物語に親しむとともに、一人一人が録音・録画などで物語を表現し、クラスの作品を作成することで日本語での達成感やクラスとのつながりを感じるために、Zoom、Seesaw、Padlet、ビデオエディターを用いて、オンラインで「おおきなかぶ」を劇として表現する活動を実施した。一連の活動により、学習者は毎年1年生が「おおきなかぶ」の劇をしていることを知っているの、自分たちもできたという達成感を得ることができた。学習者が楽しみながら

練習・録音し、写真やビデオを共有することでつながりを感じ、また個々の活動が集まることでひとつの作品としてつながることができた。さらに、作品に家族も入り込み協力した点はオンラインだからこそできたと言える。同期型の活動だけでなく、オンラインツールを使用した非同期の活動を取り入れることで、学習者も教師も新たな学習方法に無理なく楽しみながら挑戦することができた。

### 3.2 中学生の活動例（6年生～10年生共通）

物語を読んでポスターにまとめるという小学生から継続して取り組んできた活動を行った。深い読み取りや各自の考えを深めるために、Zoomのブレイクアウトルームを用いてグループで話し合いながら、Googleスライドを共有、編集し、ポスターを作成した。教師は、学習者一人ひとりに声を出させるなど、つながりを意識して授業をおこない、学習者がクラスから孤立しないよう働きかけた。グループ活動では、スライドをクラスで共有し誰もが見られるようにしたことで、他のグループの様子も参考にすることができた。このようなグループ活動では下級学年は対面授業でも教師の介入が必要だが、Zoomのブレイクアウトルームではうまく介入できず、話し合いが進まないことがあった。上級学年はブレイクアウトルームでの話し合いをもとに質の高い作品を作成し、教員の介入がなくても主体的に活動に取り組むことができた。

### 3.3 高校生の活動例（①10年生<sup>1)</sup>、②11年生）

同期と非同期でZoom、Padlet、Googleスライドなどを用いて議論を行い、内容やテーマへの理解を深めた。10年生は金田一春彦『日本語(上下)』の輪読を行った。前半の章では、感想一言だけのコメントが多かったが、後半の章では、内容を探究するコメントが多くなった。11年生はジェンダーなどに関する新聞記事の内容の共有と議論を行った。いずれも対面では限られた授業時間内でのコメントや議論が求められるため、日本語未熟達者の理解が深まらないまま進んでしまうこともあるが、オンラインで非同期の時間を作ることで、一人一人が自らの日本語力に合わせて時間をかけてじっくり理解した上でコメントや議論することができ、より積極的に活動に参加する様子が見られた。学習者の振り返りレポートにもそのことが記述されていた。

## 4. 考察

学習者は、それぞれの録音や録画を活用し統合することにより一つの作品として共有したり、つながりを得たりすることができた。また、ブレイクアウトルームの使用や同期、非同期とのバランスを考えながら活動を行っていくことで、より他者を意識した発言や話し合いができ、学年が上がるにつれて教師の介入がなくても主体的にオンラインの参加ができるようになっていくことが分かった。成果物や振り返りから、孤立しがちなオンライン環境下でも各年齢に適切な協働活動を工夫して取り入れることで、学習者は言語学習の機会を保ち、他者とながら、通常時の教室活動に類似する学習経験や効果を得られたことが示唆された。この3年間で積み重ねてきた学習経験により、急なオンラインによる授業活動でも学習者は戸惑うことなく学習を進めることが可能となった。また教師は様々なオンラインツールや効果的な使い方を知ることで授業活動の幅が広がった。対面授業に戻った現在でも、学習者も教師も様々なオンラインツールを効果的に使っている。今後もオンライン環境下の実践で得た学びを対面の実践に還元していくことが大切であり、より具体的な方法を検討したい。

1) 学年末の高校進級を意識した活動であったため、高校生の活動例として紹介する